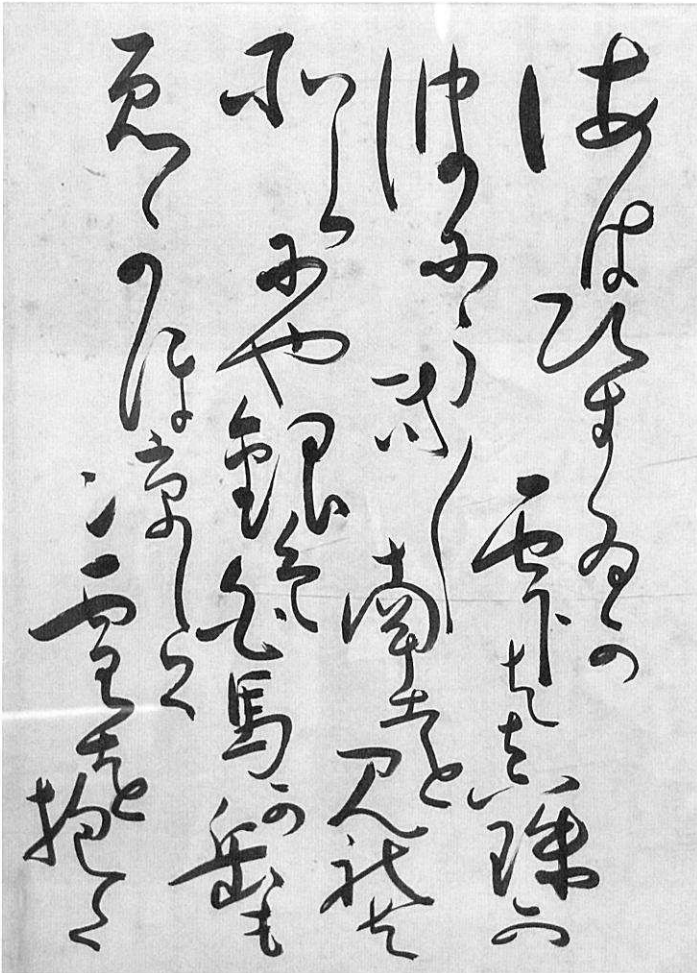


せんしん

せんしん

32号 2022年12月10日



寄稿

おとなりのおじいちゃんは御風先生

石坂あつ子さんからの聞き書き(前編)

小川 英子

《石坂あつ子》

元小学校教諭。糸魚川市大町にある相馬御風宅の西隣の石坂家長女。昭和6年11月生。現在も同地在住。昭和25年の御風逝去時は18歳。

生前の御風と親しく言葉を交わした人はすでに多くが鬼籍に入り、御風の親しみやすかった人柄を覚えていた人も少なくなつた。石坂あつ子さんは御風会理事の松野功氏から、御風と石坂家の関わりについて書きとめてほしいと依頼されていたが、松野氏は先立たれてしまわれた。

そこで、筆者(石坂家と親戚関係にある倉又家次女)が聞き書きをすることになった。令和3年12月から4年夏にかけて、何度も自宅に伺って聞き取りを重ね、御風のエピソードを記録した。あつ子さんの記憶は鮮明で、御風作の短歌もすらすらと出てくる。

本稿は初回の令和3年12月18日の聞き取りを中心に、何回ものインタビュー内容に関連のあるエピソード毎にまとめ、再構成した記録である。

あつ子さんの口調をそのまま活かしたので、御風の呼び方など統一されていないところが

ある。方言のわかりにくいところは括弧で補った。また、注をつけた。

☆があつ子さん、★が筆者である。筆者は児童文学作家であるが、この記録に創作は入っていないことを明記しておく。文責はすべて筆者にある。

筆者が訪問すると、居間に迎え入れられる。あつ子さんは「糸魚川タイムス」(平成25年9月1日付)を差し出した。そこには相馬御風生誕130周年の記事が載っていた。

☆今、これ出してきて、思い出したんよ(新聞の写真を示して)この人が御風先生の奥さん(注1)。小柄で、うちの祖母ちゃんにいわせれば、私みたいなもんじゃ声かけてくんなるし、綺麗な優しい人だった。しよっちゅう、東京に行きなさつていた。それを快く思わない人もいたよ。今ほど東京との行き来のない時代に、わがままにみえたんね。だけん、奥さんは女子大、出ている。話の合う人がいるはずがない。

★お祖母さんというのは、トワさんですね。寺町の土井家から、石坂家長男善三郎さんに嫁いだ方です。

☆そう。うちの祖母ちゃんは小学校4年卒業して、その上の高等科4年のうち、2年までいっているの。漢字も読めたし、文学書も喜んで読んでいた。家に来た人が、(家の中で)祖母ちゃんが本を読んでいるんで、びっくり

したという人もいた。
★女に学問はいらなさいといわれた時代でしたね。

★ほかにも思い出を聞かせてください。

☆御風さんは近所のことをよく知ってらした。昭和19年に、隣の松澤さんが通学団(注2)の団長で、草を刈って干して、軍馬のエサにする、それが子どもたちの夏休みの宿題になっていた。

石坂家の裏の井戸で、その刈った草を洗って、子どもたちが石坂家と松澤家の屋根(注3)に登って、草を乾かしていたら、御風さんが窓(注4)から顔を出して「夕方飲んでいてご機嫌だったのー子どもらを「こっちに来い」と、御風さんに近い屋根の上に並べさせて名前を言わせた。

子どもらが一人ひとり名のると、「そうか、どこそこの子か」と、その子の家の屋号を知っていた。そこにいた全員の子の屋号を知っていた。

「駄賃をやるぞ」といって、氷砂糖を一つまみずつ、くれた。あ、一個ずつだったかもしれない。

あの頃、甘いものがない時だったのに、御風先生のお宅にはそういうものがあつたんだねえ。石坂家の窓(注5)から顔を出して見ていただけの私にもくださつた。

★それは戦争中のことですね。昭和19年に12歳のあつ子さんは女学校に入学し、昭和23年

に卒業しました。

☆ 御風さんのお宅の看護婦さんのKさんが「『お隣りのお姉ちゃん、女学校を卒業しただけどうしなさるかやあ』と先生が進路を心配していた」といつていた。

★ 気にかけてくださっていたのですね。

☆ 御風先生とは親の代からのつきあいだね。

先生のお父さん(注6)が東京から芸術座の舞台の絵葉書をじいちゃん(祖父 善三郎)に送ってくれた。(注7)

★ 相馬家と石坂家の交流の深さがうかがえますね。

☆ その葉書、ずっと大事に取って置いてあった。あんたに見せようと探したんだけど、どこにしまつてあるかわからないでいる。

★ え、松井須磨子でしょうか。それは見たいです。

☆ 無くしてはいないと思う。入っていた箱に入っていない。また探しておくね。

★ ぜひ。貴重な葉書です。

★ 御風の奥さんのことをもう少しお話しくください。

☆ 昭和7年に奥さんは亡くなられて、私は昭和6年生まれだから、奥さんのことは知らない。

☆ 昭和3年の火事で焼ける前だったかな、先生が一番下の息子さん(注8)が遊びにくると、あの頃だもんねえ、時分どきだと、「お昼食べていかんかね」って。たいしたご飯じゃな

いのに、あとで先生の奥さんに御礼をいわれて、祖母ちゃんは「しようしや、しようしや(恥ずかしい)」って、いいとつたと。

★ 昔は遊びに来ていた子どもにも声をかけて一緒に食べました。ご馳走するという感覚ではなく、ふだんの食事を一緒に食べるだけです。

☆ 奥さんが亡くなられたあとに、身のまわりのお手伝いにKさんが来ていた。私たち近所の方は看護婦さんと呼んでた。先生は晩年はご病気がちであんまり外出しなさんかつた。

☆ 先生が病氣したら、見舞いがあちこちから来る。全国からお見舞いが来る。

★ そういうことが隣の家でもわかるくらいだったんですね。

☆ 御風邸の前で、早稲田の校歌を歌う人もいたから。

★ なるほど。

☆ 先生は入院はされないで自宅で療養してらした。だからお見舞いというか、先生を励ますつもりだろうね。

今でも、家(御風邸)の前で歌う人、おんなるけんね。

★ 御風宅の思い出をもう少し、話してください。

☆ 御風邸と石坂家の間の土蔵のある部分の塀は、今の塀とちがつて低い垣根(注9)だった。他は高い板塀。とくに中庭は外から見えない

ように、(現在と同じ)高い板塀だった。

☆ 御風邸の、今、土蔵のところは、昔は畑だった。そこに牡丹が一本あって、花が咲いていた。御風先生がいつも世話をしていた。

前の道路を荷馬車を通る、今ほど自動車なんてないから。そのとき、馬が落とし物すると、先生は家から出てきて、着物の尻からげしてほうきとちり取りで(馬糞を)拾って、牡丹の根元に埋めていた。だから見事な花が咲いていた。

タンポポも畑に咲いていた。小さいころ、私が祖母ちゃんと一緒に通りかかると、先生が「姉ちゃん、タンポポ、ほしかつたらやるよ」と声をかけてくださった。子どもだそい、「おらうちにもあるそい、いらん」て。先生は「そうかそうか」と笑ってらしたが、「うちの子はまあ」と祖母ちゃんは嘆いていた。

★ 子どもらしい返事ですね(笑)。

☆ 小さいころのことだったんで、ほんとはあまり覚えてない。けど、祖母ちゃんが他の人に繰り返して、その話をしていたので、覚えてしまった。

★ 繰り返し聞かされると忘れてくても忘れられないですね。石坂家も花を植えていたのですか。

☆ 井伊各量さん(正覚寺前住職)は、「文子さん(注10)が『お隣りの庭がきれいだったのを覚えてる』といつていた」と教えてくれたことがあった。

★ 文子さんの記憶に残るくらいだったのです

ね。

☆御風邸の庭と玄関の近くまで、うちの屋根が迫っていた。

御風邸の仏間と内蔵(注1)の間の中庭に、池があった。そこに大きな松の木があった。昼はアブラゼミ、夕方はカナカナが松の木にとまつて鳴いていた。

先生は浴衣の尻っ端折りをして、池の水替えをしていた。「お願いしますねえ」とうちに声をかけて(石坂家の排水溝に)御風先生がご自分で水替えの水を流していた。

この松の木は中庭が狭いので根が枯れたか、切ったか、戦争中になくなった。まきにして風呂を焚いたと書いてあるようだけど。どこに書いてあるかは知らない。たぶん『野を歩む者』のどこかだろう。松の根は残っていた。

☆御風邸の裏の出口にも桐の木があった。
★桐の木は、女の子が生まれると植えるといっています。その子がお嫁に行くときに切つて、それで箆笥を造つてだか、売つたお金で誂えてだか、嫁入り道具として持たせるといいます。倉又家の裏庭にも桐の木があり、そう言い聞かされていました。

★ところで、御風宅の庭に、「桃の木」はあったのでしょうか。御風作詞の「春よ来い」に桃のつぼみが出てきますが。
☆私が知っているかぎりでは、桃の木はなかった。

御風先生の歌に、「庭先の山茶花の花咲きそ

めて駒ヶ岳にも雪は来にけり」というのがあるけど、今の庭に山茶花はない。だから昭和3年の大火以降、庭の木は変わったかもしれない。昭和3年前の庭がどんなだったかは、私は生まれていないから知らない。

歌に出てくる文子さんが何歳かにもよると思うよ。

★そうですね。大火前の庭にはあったかもしれないですね。

桃のつぼみには詩経の四言古詩「桃夭」を重ねているという説もあります。だから実際の桃の木を見て歌詞を作ったのではなくて、想像の桃のつぼみかもしれませぬ。

以前、御風宅の近所に住んでいた方にも、桃の木のことを尋ねたことがあるのですがその方も桃の木は記憶にないとおっしゃっていました。でもそれもやはり大火後の庭です。

大火前の庭のことは調べる術がないですね。庭の桃の木を詠った歌が見つかればはつきりしますが。御風は日記を残していません。その代わりのように、「野を歩む者」を発行し続けていました。

☆父から封筒を預かって、今思えば『野を歩む者』の誌代だろうと思うけど、それ持ってお隣りに行って、「ごめんください、ごめんでください」と、玄関の戸をトントンすると、御風先生が出てきて「おう、姉ちゃんかね」つて。

領収書を書くために、先生はいったん引こんで、その封筒に領収書を入れて持ってき

て、「お駄賃やるよ」つて。

普通はお駄賃ちやあ、キヤラメルか煎餅、それなのに、懐紙に包んでいいお菓子をくれた。上生菓子だったと思う。それが楽しみ。近所の同じ世代のSさんにその話をしたら、「おまんもかね。俺もだ」て。お駄賃が楽しみで御風先生のところにお使いに行った。

その頃、文子さんはもう女子大に行つていて家にいなさらんかったと思う。文子さんは私より10歳以上、上だから。

★子どもがお使いに来ると駄賃をあげるといいうのも、昔の風習ですね。(次号へ続く)

注1 奥さん

テルまたは照子。東京市京橋区(現東京都中央区)に生まれる。昭和7年没。衆議院議員藤田茂吉次女。

注2 通学団

集まってみんなで登校した。高学年の子が団長になった。女子と男子で別々の通学団だった。このときの松澤さんは6年生だったので、男子の通学団の団長だった。

注3 石坂家と松澤家の屋根

トタン屋根なので、屋根の上を歩くと音がする。それと子どもたちの声で御風先生は気がついたのだろう。子どもたちが上がっていたのは高い大屋根ではなくて、ひさし。両家はほぼくっついていて。

石坂家は昭和3年の大火で焼ける前は倉庫

があった。松澤家が倉庫の場所を借りて住めるようにしたところに、昭和3年の火事があり、焼けた。そこで、御風邸側に松澤家に移ってもらい、奥にあった石坂家が前に出た(現在の姿)。

石坂家のうしろは庭と畑だった。(今、駐車場になっているところがあいていて花畑だった。その奥に石坂家が建っていた。)

松澤さんの家は二階家で、台所部分だけが平屋だった。石坂家は土地だけ貸して、家は松澤さんが建てた。(以上はあつ子さん談)

注4 窓

御風宅の階段のつきあたりの窓。現在もその窓はある。

注5 窓

石坂家の裏二階の廊下の窓、現在もその窓はある。

注6 先生のお父さん

相馬徳治郎。寺社建築をする宮大工の棟梁第4代糸魚川町長も務める。1918年(大正7年)没。享年70。

注7 絵葉書

『石坂家の歴史』(石坂善雄著) 4巻目のp59にその絵はがきの写真(表・裏)と内容が掲載されている。

注8 一番下の息子さん

次男(1911年生か、三男(1914年生)か、不明。

長男昌徳は1910年生、1歳で死去し、御風が1915年に糸魚川に戻るきっかけの

御風宅と石坂家の配置

昭和17年に増築した部分。それ以前は畑。奥土蔵は昭和19年完成。
Ⓢは増築前に桐の木があった場所。



往來(旧国道)

一つとなる。

四男元雄も1915年に生まれたが、1919年に3歳で死去。末っ子の五男茂も1930年生、3ヶ月後に死去。

御風の子6人のうち、成年に達したのは、長女文子と次男昌充、三男皓の3人。

注9 低い垣根

現在のよう竹ではない、木の垣根だった

注10 文子

御風と照子の長女、文子。1921年(大正10年)生まれ。2009年没。「春よ来い」の歌詞「歩きはじめたみいちゃん」のモデルといわれている。

注11 内蔵

内蔵は母屋の中にある蔵。ちなみに外蔵は母屋の外に独立してある蔵。

糸魚川小唄保存会活動

糸魚川小唄保存会 会長 中川 一成

昭和の二度に渡る糸魚川大火からの復興を願い、糸魚川町に活気をもたらそうと、相馬御風作詞、中山晋平作曲、藤蔭静枝振付に依る『糸魚川小唄』が昭和十一年八月発表されました。その後、踊りがお座敷調の為、誰でも踊れる様な振り付けを望む声が多く寄せられ、昭和二十八年、依頼を受けた藤間千鶴(宗家藤間流師範、本名白澤千鶴子・平成二十九年没)が、新たに振付、春一番の「けんか祭り」をイメージし次のような意味が込められています。

祭りだ、祭りだ、稚児の舞
山から見下ろす、大海原の日本海
お神輿かついでワツシヨイ、ワツシヨイ、
人の波

以来長く親しまれてきましたが、踊りの上手下手ではなく、この振り付けの趣旨を忘れず伝承と啓発を活動の目標に、平成三十年四月「糸魚川小唄保存会」が発足致しました。

以後、「御風さんを歌おう!」やNHKの「民謡魂」への出演にも参加しました。また糸魚川東小学校(三年生)や、糸魚川小学校(四年生)、西海地区公民館(一般)等々楽しく啓発にも努めてきました。

お陰様で当会への協力も頂いております。令和二年九月、第十六回「いとしんいきいきまちづくり団体表彰」の栄にあずかり表彰金

を頂き浴衣の調達資金とさせて頂きました。また令和三年一月、糸魚川中央ロータリークラブ様より踊り用草履四十人分の贈呈をいただきました。ありがたいことです。

糸魚川地区公民館を会場に、例会、会員の踊り練習や啓発、普及活動、交流等を計画し実施しておりますが、コロナ禍の影響で消化できないのが今の実情です。

昭和の時代、どこの小中学校の運動会でも最後に糸魚川小唄が流れ踊りの輪が出来ていて誰もが知っていた糸魚川小唄、あのような唄と踊りの伝承の輪の拡がりを願い取り組んでいきたいと思っております。

全国に向かって紹介するに、大変苦心され推敲に推敲を重ねた相馬御風作詞の糸魚川小唄の春夏秋冬を自分達自身で唄い踊れる様に練習も始めております。郷土を愛した御風さんの糸魚川小唄をいつでも、どこでも、誰でも、共に楽しく、和やかに糸魚川市民として唄い踊れる伝承の広がり求めて活動しています。



練習のようす

多くの会員に支えられる



相馬御風の短歌(曲)を歌う会

代表 松澤 フミエ

「相馬御風の短歌を歌う会」発足当初の会名です。会が立ち上がったのは、青海出身のマリンバ奏者斉藤裕子さんのふる里での「第3回マリンバリサイタル(2013)後。ちょうど御風さん生誕130年の年です。裕子さんのお師匠さんである仙道作三先生が金子善八郎先生にお願いで、御風さんの短歌の中から海の歌を選んで頂き、その中の5首を曲にしてくださいました。

そして裕子さんの中学時代の恩師の声掛けで、合唱メンバーが集まりました。リサイタルも無事終わって打上時美味しいお酒を頂きながら、「この曲を1回で終わらせるのは勿体ないよね」の言葉で合唱団が立ち上がり歌い継いできました。まずは「海の短歌五景」
一、海越えて能登のあなたへ沈む日は
越の雪山に光のこせり

二、うらうらと大海原にいづる日の
光さへぎる雲だにもなし

三、梅雨晴や白帆すずしき朝風ぎに
佐渡山うけて海かがやくも

四、海はらのあなたにも雲の峰立てり
佐渡山のあたり能登山のあたり

五、かくり岩によせてくださる沖つ波の
ほのぼの白き星あかりかも

皆様も機会がございましたらお聞きください。壮大な日本海の春夏秋冬を思い浮かべる

事が出来るかと思えます。

そこで気をよくした私たちは、「糸魚川には山もあるよね」と仙道先生におねだりしてしまいました。そして又々金子先生に短歌を選んで頂き、今度は山の歌を8曲作って頂きました。また機会がございましたらご紹介したいと思えます。

御風さんの歌には幼い頃より歌っていた「春よ来い」、意味もわからず歌っていた「カチューシャの唄」。小、中、高と御風さん作詞、中山晋平さん作曲の校歌を歌い、小学校の運動会の終わりは糸魚川小唄を踊る。何と贅沢な事だったのでしょ。

今、市の5時のチャイムで流れている飯吉亮一さん作曲の「ふるさと」は御風さん生誕百年の記念で糸魚川駅前に歌碑ができ、その除幕式で糸魚川幼稚園の即席ママさんコーラスで歌ったのを記憶しております。

合唱団を立ち上げてから、海、山の短歌ばかりでなく、沢山ある歌も一緒に歌っていきたく、短歌の後に(曲)と入れて(うた)と読ませる事にしました。「相馬御風の短歌(曲)を歌う会」の誕生です。御風記念館で出版されている「相馬御風作詞楽譜集」の中にも知らなかった曲もあり、色々調べると「銀の鈴」という竹久夢二さんの挿絵入りで素敵な相馬御風童謡集に出逢うことができました。あれもこれもと欲張ってみましたが、団員も高齢化には勝てず少なくなっていて、存続も危ぶまれましたが、何とか続けていこうと

皆で確認し合ったところです。
ぜひ一緒に歌いませんか。いつでも大歓迎です。



平成 29 年度
糸魚川市文化協会フェスティバル

ブルーノ・タウトの日記

堀口 良作

糸魚川のセールスポイントは、国石の翡翠の産地、ジオパーク、そして糸魚川真柏などが挙げられる。もう一つ日本海に沈む夕陽、糸魚川の夕日の美しさを全国で紹介したのはブルーノ・タウトでないかと思う。

ブルーノ・タウト(一八八〇〜一九三八)

は東ドイツのケーニヒスベルクに生まれ、同地の国立高等建築専門学校に学んだ。一九〇八年にベルリンに建築事務所を設立し多くの建築設計を行った。とくに大小の住宅設計において一流の建築家としてその地位を確立した。一九三〇年ベルリンのシャルロッテンブルク工業大学の教授として住宅建築の講座を担当した。彼の提唱する集合住宅によって一般市民の住宅環境の改善をしようとする建築は社会主義的思想と見なされた。一九三二年モスクワ市庁に招かれ十か月ほど建築設計に携わったのも一因である。彼はナチス政権の

成立する数日前の一九三三年の三月一日に友人から身辺の危険を告げられその日の夕方、エリカ夫人を伴いベルリンを脱出してスイスに逃れた。彼はナチス政権に目を付けられたのはユダヤ人との噂があったが、純粋なドイツ人であった。

彼は日本への亡命を決めてフランス、イタリア、トルコを経てソ連邦に入りシベリア鉄道によってウラジオストック、敦賀に着いた

のがその年の五月三日であった。

しかし日本でもすでに国粹主義的な情勢が強力になっていたので、大学に職を得る事はなかったのである。そんな中、一九三四年の夏からは群馬県工芸所に籍を置き工芸品の設計と製作にあたり百数十点をデザインした。アメリカに亡命するまで、日本には三年半滞在し、京都の桂離宮、伊勢神宮、日光東照宮、飛騨の白川村、秋田の民家などを訪れた。そして建築学的な立場から、それらを分析し、日本の建築美を世界に紹介した。

また、飛騨から日本海沿岸の各地への旅、冬の秋田への旅の日記。そこに彼の建築家の美に対する鋭い感覚で日本の風土や建築をとらえている。

「飛騨から裏日本へ」は、一九三五年五月十六日から二十九日の旅行の日記であり、京都から高山、富山より新潟、佐渡を巡り秋田へ。青森から松島を訪れ東京までの記録であり、その日記の中に糸魚川が記されている。

五月二十日(月)

富山く親不知く能生く柏崎

富山駅より午後二時五十分の列車で新潟へ発つ。しかしこの汽車だと新潟着が夜の九時頃になるものだから七時に柏崎で途中下車をした。この沿線は日本でも最も興味のある区間であろう。富山から間もなく線路は日本海に沿い、右方にはいつも日本アルプスの険峻な連山、―富士山ほどの高い山々が白雪を帯

びて平野を俯瞰し、嶺頭は雲と戯れている。

略

途中に親不知という駅があった。ここでは親の安危さえ気遣っていられないという意味である、つまりこの辺は狭い険路が断崖と海との間をわずかに通じているので、昔この難所を越える旅人達は、自分のことだけしかかまっていられなかったのである。汽車は今でも波打際を通っているから、嵐の時などは波の飛沫を浴びるに違いない。

これから先の景色がまた実に素晴らしい。海中の岩、入江、入江に沿う漁村、大勢の人達が海に入っていた(魚や蟹、海藻などを採っているのだろうか)。遊んでいる子供達、なかには真裸のもいる。能生あたりの景色が一番美しかった。太陽はあかあかと沈んでいく。ぎらぎら輝く海に照り映える落暉(夕日)。折から列車が、広大な海景の眺めをほしいままにする一駅に停まったので、私達はこの特別眺めの景色を満喫することができた。太陽は、真赤な柔らかい色をした大提灯になり、やがて蒼茫とした水平線にたむろしている夕闇の中へ沈んでいった。略

タウトの旅した、一九三五年は昭和十年である。タウトを魅了した旧北陸線の海の光景は現在、頸城自転車道となっている。糸魚川の親不知から能生の夕日の絶景をもっとアピールして頂ければと思うのである。

御風師も多く海の歌を詠んでいる。三十代後半の歌を吟味して頂ければと思います。

夕されば浜のをちこち火を焚きて
裸の人等むれて涼めり

大正七年 夏雜詠より

宵に咲きあしたにしほむ北うみの
砂山かげの月見草の花

大正十年 月見草より

相馬御風 — 歌と人生 (一)

金子 善八郎

にぎり水出たとて魚釣りに行く 窓竹

昌治少年は、大人に混じって俳句の会に出
ていたと言います。これはその時の俳句です。

「窓竹」はペンネーム。

母親は、子どもの姿が見えなくなると、大
声をあげて探し回り、見つけるとすぐに連れ
戻したと言います。そのため、家での一人遊
びの多い子どもでした。

雑煮食ふ膳はあれども母はなし 窓竹

御風が母を亡くしたのは高田中学三年の時。
糸魚川の家に駆けつけた時はもう真つ暗。昌

治少年を目にした母は、子どもの手を握りし
める力もなく、ポロポロと涙を流すだけでし
た。

亡くなった母の年は四十一歳。一人息子の
将来を見届けることのできない無念の早世で
した。

年が改まって春を迎えても、母を亡くした
悲しさが身に染むばかり。初めの俳句は、当
時の日記帳に記されていたもの

とむらひのむれは泣く子の手をも引きて
今し雪つむ門べ出づらむ

死の床に就いた母は、乳母を枕元へ呼び
「昌治を頼む」と繰り返したと言います。

母子ヨは、昌治を生んだとき、重い腎臓病
にかかり母乳を飲ませることができず乳母が
必要だったのです。後年御風は、「私は母の
懐を知らずに育った」といっています。

歌は乳母の死を悼んだ連作の一首。葬式に
集まった人びとが、呆然としている子どもを、
野辺送りにせきたて、深く雪に埋もれた家か
ら棺が運び出されようとしている出棺の光景。
御風は、この泣きくれる子どもの姿に、かつ
ての自分を重ね合わせているのです。

泣けばとて負けしにあらず剣とり
世と戦ふを来てみそなはせ

「泣けばとて負けしにあらず」、悲しくて時

には涙を流すようなことがあってもけつして
負けたものではありません。剣をとつてこの世
の苦しさで戦います。天国のお母さん、どう
ぞご覧になってください。

昌治少年は、中学生の時、放課後毎日のよ
うに武術の練習に励みました。また宿は下宿
ではなく家塾で、家主の庄田直道は高田榊原
家の家臣、儒学にも造詣の深い文武両道に優
れた武士。この人から「徹底した古武士的訓
育を受け、その薰陶により、これまで脆弱で
あった心身に剛毅精神な気風を培われた」と
いいます。

白さぎの行方を雪に見失ひて
獵夫たたずむ沼の夕暮れ

三校、現在の京都大学の受験に失敗した御
風は、佐佐木信綱の主宰する「竹柏会」の新
年歌会に出席し、この歌が、一等に選ばれま
した。

そして、文芸投稿雑誌「秀才文壇」の懸賞
にも入選し、若山繁、後の若山牧水などと
も写真が掲載されました。

中央の雑誌に御風の写真が載ったのはこれ
が初めて、歌壇、文壇へのデビューです。

春の磯二人あゆめば夕映えは
砂に黄金の道つくりけり

砂浜を並んだ歩く二人、影は長く後を引き、

足跡はまるで黄金の道のように光り輝く。御風は、この歌を詠んだ前年、母校早稲田大学の校歌「都の西北」を作詞し、「口語自由詩」を提唱して一躍注目されました。

そして福沢諭吉の愛弟子『文明東漸史』の著者藤田茂吉の二女、テルと結婚しました。—順風満帆、二人の未来は、夢と希望に満ちあふれていました。

ころげよといへば裸の子どもらは
波打ちぎはをころがるころがる

真夏の太陽がまぶしい海辺、歓声を上げて波と戯れる裸の子どもたち。

歌は、大正五年(一九一六)三月、一家を挙げて糸魚川へ帰ったその夏に詠まれた一首です。

大正の初め、御風は思想的に行きずまり、不眠症になるなど健康を損ねてしまいます。

『還元録』一卷を出版、友人知己に呈上して、身も心もボロボロになつての糸魚川退住でした。

ぎやまんのきりこの瓶ゆ汲みたての
水注ぎ飲みし妻が目に見ゆ

テル夫人は、東京生れの東京育ち、雪国の田舎暮らしなど思いも及びませんでした。

テルは、五男一女六人の子どもを産みましたが三人の子どもを亡くしました。長男昌

徳は一歳三か月、四男元雄は三歳で急死。五男茂はわずかに三か月の命でした。

テルの亡くなったのは昭和七年、四十二歳。「人間、同じ死ぬなら美しいうちに死ぬに限る」が口癖だったといえます。

「ぎやまん」はガラスの器。「きりこの瓶」はカットグラス。ガラスの器で汲み立ての冷たい水を飲む、妻の美しい横顔。

いそのかみににしへ人のもちしてふ
土器のかけらに残る指あと

「いそのかみ」は、「いにしへ人」にかかる枕詞。縄文人の指の痕が、数千年の時を超えて生々しく残る土器片、それを手にした時の言い知れぬ感動。

大正七年、御風は糸魚川町史編纂委員長を委嘱され、長者ケ原遺跡を度々訪れました。それが、後に、糸魚川にヒスイがあること—ヒスイの発見に繋がります。

握りたるこぶしの中の綿屑をそのまま
持ちて子は死にゆきし

親にとつて、子どもを亡くすことほど悲しいことはありません。

歌は、五男茂を亡くした時の歌。

「握りたるこぶし」赤ん坊の柔らかな手の感触が伝わります。「そのまま持ちて」にあきれめ切れない夭折の悲しさが増幅されます。

—この頃御風は、友人に宛てた手紙に書いています。「よそのこどもの泣き声、が耳につき困り候」

雪の夜をろりにひとりあたりつつ
黙しむたりし父は忘れず

糸魚川に帰って間もなく大正七年、父徳治郎が亡くなります。亡くなったときは認知症が重く、可愛い孫も近づけなかったと言います。そのため御風は、三か月も、一人で寝ずの看病をしました。

しかし、看病は大変だったが父親の最期を看取る事が出来て「ありがたかった」といっています。



東京小石川高田豊川町の家にて
右から御風・テル・昌允(次男)
・徳治郎(明治45年)

『相馬御風遺墨集』を巡って

岡村 鉄琴

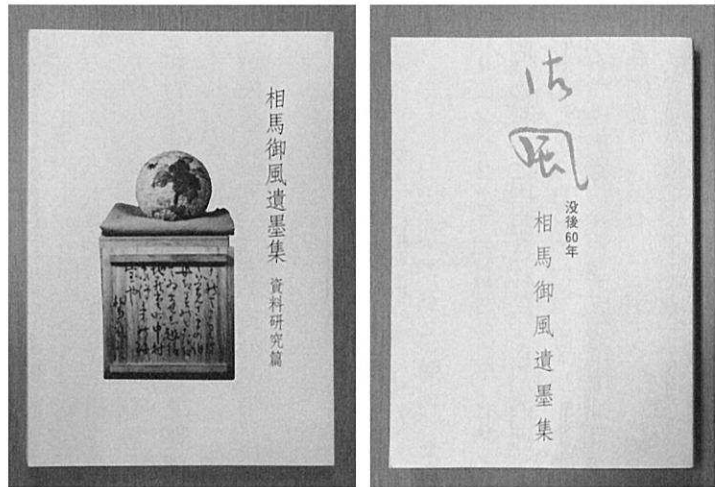
安田鞞彦を筆頭に、大正期早くから良寛の書を日本画家が蒐集し始める中、上越出身の横尾深林人もまたその一人であった。縁あって深林人作を重ねて拝見するうちに作品自体に興味を抱き、平成二十一年(二〇〇九)一冊にまとめた。また深林人は一時糸魚川に疎開をして、その後相馬御風との交流を持った。深林人作の調査の先々で、御風作に接するようになる。それまで御風の書は一色だと捉えていたが、次第に作風の変遷に気付く。

期せずして平成二十二年(二〇一〇)が御風没後六十年に当たることをつながい、この節目の年に多くを収める作品集をまとめてみたい思いにいたる。糸魚川歴史民俗資料館内に事務局を置き、御風会を頼りにして遺墨集刊行委員会を組織して頂く。先述の『良寛ゆかりの文人 横尾深林人 相馬御風集』発刊が平成二十一年五月八日だから、編集期間はおよそ一年も無かったことになる。算段は当時文化振興課におられた小林猛生氏が尽力くださった。そして御風会の総会に出席して刊行の方向性を了承頂き、刊行委員会代表には御風会会長・永野敏郎氏が就任くださった。

それからは大学講義の合間、小林氏と二人三脚で所蔵先に伺い、一日で何カットも撮影することを繰り返し行なった。木蔭会会員で御風門下のお孫さんに当たる方々を回ることに

多かった。こうして取材先をふり返ってみると、再び拝見叶わぬ作が何と多いことか。代替わり、閉店、そしてあの糸魚川大火によって老舗割烹の歴史と共に焼失したのである。一冊にまとめた意義は確かにある。

館蔵作品は自分の目で選定したが、当然いたらぬ点が多い。ただ総じて、大よそのものは、実物を確かめながら小林氏のカメラに収めていった。



『相馬御風遺墨集』本編(右)と資料研究編(左)

改めて遺墨集を開くと掛軸、短冊、色紙、額等多彩な書式のものが多い。中に画讀も割合たくさん含まれる。ノートや原稿類では極若い頃の筆蹟もある程度の量が残り、壮年期の原稿にいたっては分析しきれない量が保存されており、生涯を通して御風のペンの仕事がおびただしい分量に上ったであろう気配が看取された。

蔵印も押印でできるものは原寸で収録した。不思議なことに御風の書には押印のあるものが少ないものの、所蔵印はある程度の数が保存されている。刻者の判明するものは多くない。勝田忘庵と高田緑雲、それと中国の著名な文人・斉白石刻があった。あとで気付いたが、数顆印影の掲載をもらってしまった。

歌碑及び書碑の拓本は、私自身が市内外に採拓したものを収めている。御風を撮した写真も予想より多くが伝わって、中から一定量のカットを入れた。

編集を進める途次、当然御風の集めた館蔵の良寛書に目が移り、こちらにも全てを収めた。次いで自分が関心を持つ會津八一についても八一作、そして御風宛八一書簡の全文を入れた。加えて御風の良寛書への箱書が多いのは知られたことだが、この本には館蔵品の良寛書の箱書と併せて他者作への箱書も収めた。これらを「資料研究篇」と題した別冊とし、箱入り全二冊本を三〇〇部刊行したのだった。

なお御風の著述の紹介も行っているが、私の方は殆どこの内容を読んでいない。という

より、半生を捧げてでもそれを遂げるのは容易ではないのである。心残りは『野を歩む者』に触れられなかったことで、後で知ったがこの一人雑誌は時々の御風の生活がリアルに映し出され、読み物としてもおもしろい、と個人的に思った。

幸い糸魚川帰住・良寛研究百年を記念して平成二十八年(二〇一六)に全国良寛会総会が糸魚川市で開催された際、「ようこそ！御風ワールドへー御風が糸魚川から発信しようとしたこと」と題し記念講演をさせて頂いた。この時の資料に用いるべく、糸魚川歴史民俗資料館に通って『野を歩む者』全号に目を通したのは、特別な経験になった。

足りなかったことを併記しつつ、以上御風没後六十年の前後を回顧した。当時から年月はあつという間に経ち、やがて七十年目がやってきた。そこで一部の方と遺墨集の補編・続編を出そうと熱心に語り合い、調査にも再度伺った。別の形でこの年は銘々の行事があつたものの、結局、書の記録集の刊行は前に進まず今日にいたる。

発行から十年以上を過ぎ、遺墨集に寄稿くださつた御風会の大切なメンバーがご逝去され、御風の遺墨自体の鑑賞や保存についても、益々難しい時代が訪れている現実がある。そこで、今回せっかくなの寄稿依頼を受けながら個人の懐旧録に終始してしまい申し訳ないが、あの大冊の生まれた背景を若干明記したかったのと、今後の顕彰方法の一つとして、やは

り遺墨の重視を提案したく拙稿をつづつた次第である。

良寛も真筆が伝わったからこそ、様々な研究が可能になっている。叶えば本誌次号から遺墨集の続編のつもりで、歴民に寄贈されたものから、少しずつ作品と関連する資料のご紹介を続けてまいりたい。これは、寄贈作の活用にもつながろう。

(越佐文人研究会代表・新潟大学教授)

糸魚川小唄の謎めく歌詞

榊 正喜

令和4(2022)年11月4日、ヒスイが「新潟県の石」に指定された。さかのぼると平成20年(2008)には糸魚川市により「市の石」に定められ、平成28年には日本鉱物科学会により「国石」に選定されている。

市、県、国の順に、「ヒスイ」「翡翠」「ひすい」という表記を採用しており興味深い。というのも、御風作詞の糸魚川小唄の歌詞に出るヒスイも片仮名、漢字、平仮名(変体仮名)の3種類の表記がなされているからだ。

糸魚川小唄は、大糸北線根知・小滝間開通(昭和10年12月)で糸魚川駅から小滝駅までが繋がり、大糸線の全通機運が高まった動きのなか、糸魚川顕勝会と糸魚川二業組合が観光誘致のために制定したご当地ソングである。作詞は御風、作曲は中山晋平、振付は藤

蔭静枝、歌は小唄勝太郎と小野巡による。

昭和11年8月、糸魚川町の二度の大火(昭和3年と7年)からの復興並びに糸魚川小学校増改築落成祝賀会があり、そこで同小唄は初披露された。

3番(レコードでは2番)の歌詞は、御風著作の初出「野を歩む者」第39号では次の表記である。

海は翡翠か雫は真珠か
波にうき／＼南を見れば
空にや銀いろ白馬ヶ岳も
笑顔涼しく雪を抱く。

「海は翡翠か雫は真珠か」の一節は「海は翡翠のように美しく透明で、波の雫は真珠のようにきらめく、と解釈できるかと思う。

「銀」「白」も出てきて、美しい色で糸魚川を印象深く発信する効果も当然狙っている。ただ、御風は海の色を表す場合、短歌では「蒼」がみられ、童謡「夏の雲」では「るり色」が象徴的である。ヒスイを海の色として使用する例はほかにみない。

そして、糸魚川とは全くゆかりのないワード「真珠」が歌詞にあることはおやと思わせられる。翡翠と真珠の組み合わせは「魏志倭人伝」を連想させる組み合わせだ。

さらにこの歌詞は、初期の原稿段階(原稿用紙にペン書・推敲を重ねた跡あり・相馬御風記念館蔵)では、「海はヒスイか雫は珠か」

と書かれており、これは注目に値する。「海はヒスイ岩塊で、波の雫はヒスイの珠」と解釈できるからだ。

ヒスイがこの地方で産出すると再認識された具体的な年については、昭和10年説と13年説の二説が有力である。

糸魚川小唄のこの歌詞は、昭和10年説、そして御風がこの産出について敢えて黙していた、むしろ隠したかったとする仮説にしっくりくるのではないだろうか。

現在まで確認されている歌詞の書きぶりは表のとおり。

人の目に触れる機会が多い活版印刷物では一貫して「翡翠」「真珠」を漢字で表記し、真珠を「たま」と読ませている。

「真珠」はパールではなく、実は「またま」――玉の美称――の意味を含ませることが御風の本意なのかもしれない。そして、「真珠」と表記することで目を欺く…:は言い過ぎだろうか。

この敢えての沈黙という仮説においては、何故そうする必要があったのか、推測がいくつか試みられているが、私は資源の枯渇を危惧するところが第一であったと推測する。当時の類似する事例でいうと、自生する糸魚川真柏をめぐる熱狂と、大系線の小滝延伸が関係しているのではと思うのである。



絵葉書に使用された御風書「糸魚川小唄」。現存するのか、どこで所有されていたかなど詳細はわかっていない。

出典等	表記	備考
昭和11(1936)年 月刊新聞「糸魚川便り」 (糸魚川通信社)	海はヒスイか雫は珠か	原稿用紙にペン字 10番まで
昭和11年9月1日発行 月刊新聞「糸魚川便り」 (糸魚川通信社)	海は翡翠か雫は真珠か	活字 10番まで
昭和11年10月17日発行 「野を歩む者」第39号	海は翡翠か雫は真珠か	活字 10番まで
昭和12年5月16日発行 『相馬御風歌謡集』	海は翡翠か雫は真珠か	活字 10番まで
絵葉書掲載の書(詳細不詳)	海はひ須ゐ可雫は多ま可	紙本墨書 10番まで
鶴来家の横額 ※平成の糸魚川大火で焼失	海はひすゐ可雫は多ま可	紙本墨書 10番まで
旧大久保様の横額	海はひすゐ可雫者真珠可	紙本墨書 1く3、9、10番

令和3年度 御風会 事業報告

□御風忌・総会 中止
 □米吉忌 中止
 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため

□会報「洗心」第三十一号発行

令和三年十二月二十八日、六百部

□理事会(一回)

・令和三年五月二十七日 午前十時

□相馬御風顕彰ふるさと俳句大会への協力

賞品提供 児童生徒の部へ図書カード

令和三年十一月二十日

会場 ヒスイ王国館

【御風賞(最優秀賞) 作品の紹介】

一般の部

西 史紀様(長崎県長崎市)

風船を逃がし地球を軽くする

小学生の部

内田 光様(下早川小学校6年)

妹が王様気分うまじやし

中学生の部

小林 詩様(糸魚川中学校2年)

部活後の鏡の中にトマトいた

高校生の部

若松 綾様(海洋高等学校2年)

底引きで旬の真鱈が光る網

春の叙勲

会員(理事)の金子善八郎さんが、令和四年春の叙勲で旭日单光章(文化財保護功労)を受章されました。おめでと〜ございませう。

お悔み

御風顕彰に長い間ご尽力された会員が他界されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

■蛭子 健治様 令和四年八月逝去

会員募集(年会費が二千円に)

御風会では新規会員を募集しております。年会費が二千円になりました。本紙をご覧になられた方で希望する方は、事務局までご連絡ください。

令和4年と5年のういき

- 令和4年(2022)
- ・勝山隧道西口雪崩災害二〇〇年
- ・相馬御風宅県史跡指定七〇年
- ・出雲崎良寛堂建立一〇〇年

令和5年(2023)

- ・童謡「春よ来い」発表一〇〇年
- ・相馬御風生誕一四〇年
- ・水保観音甲種国宝(旧国宝)指定二〇〇年

《表紙紹介》

相馬御風作併書「糸魚川小唄」より
 紙本墨書・個人蔵

海はひすゐか雫は真珠か
 波にうき／＼南を見れば
 そらにや銀色白馬が岳も
 ゑがほ涼しく雪を抱く

御風直筆による平仮名「ひすゐ」が目を惹きます。片仮名「ヒスキ」(原稿用紙にペン書)は、本紙第28号の表紙と第31号の山岸洋一さんの稿で紹介したところ。漢字「翡翠」がどこかに自筆で書かれていないか探しています。

【編集・発行】

御風会(事務局・相馬御風記念館内)
 〒九四一・〇〇五六
 新潟県糸魚川市一の宮一―二―二
 電話番号 〇二五(五五二)七四七一